

ハーディの短詩をめぐって

増山学

I

トマス・ハーディは一八九八年、処女詩集『ウェセックス詩集』(Wessex Poems, 1898)を出版したが、彼の心中に秘められた決意には、並々ならぬものがあつたようである。彼自身次のように語っている。「詩の真実の意識、即ち詩の文学に於ける至高の地位の意識が、かねて私の心中に目醒めていた。世間的な前途の見込みをすべて破滅するような危険を冒して、私は詩に手出しをしたのである。」^① 事実、彼は書肆に費用の負担を申し出た位であつた。幸い其の必要がなかつたが、世評は大体、毀誉褒貶相半ばするというのが、実状であつたらしい。しかし、初め小説家として成功を取めた作家が、詩に手出しをすれば、失敗間違いなしという先入主に囚われている世間に、彼は憤懣をぶちまけざるを得なかつた。間もなく彼は宣言した。「いかなる人の詩でも、最後の一行が書かれるまでは、本当の判断は下せない。最後の一行とは何か。其の詩人の死である。」^② 文字通り棺を蓋いて事定まる、の思想であるが、彼の執心ぶりには何か苛烈なものが感じられる。

しかし、二十年後に漸く、彼が多くの詩人達から、詩人として認められる時機が到来した。即ちそれは一九一九年六月、四、五十人の詩人から、自筆詩集一卷を贈られた事である。彼は各詩人に自筆の礼状を、かなり長期間かかっ

て書いた。現代詩壇から詩人としての地位が認められた事は、確かに大いなる喜びであったに相違ない。

此の年には重ねて喜びがあった。それはかねて念願の『全詩集』(*The Collected Poems of Thomas Hardy, 1919*)の出版である。此の詩集を手にして、痛く感激した批評家がある。それはマリ(John Middleton Murry)であった。「私は、かねがね彼(ハーディ)に会いたいと望んでいたが、彼の『全詩集』が一九一九年の冬に出版されるや、どうしても会いたいという気持が、殆ど偏執狂状態にまで高じた。確かに、私は其れまで、そんなに現存作家に会いたいと、思った事が一度もなかったのだが」と、マリは述懐している。彼は其の感銘の跡を、早速雑誌『アッシュニーム』(*The Athenaeum*)に発表した。之は「ハーディ氏の詩」(“The Poetry of Mr. Hardy”)と題され、翌年彼の『文学の諸相』(*J. M. Murry: Aspects of Literature, 1920*)の中に収録されてゐる。

此の狂信的とも云える傾倒ぶりの理由を、マリは次のように説明している。ハーディの『全詩集』が現われた年というのは、第一次世界大戦の終熄した翌年に当る。夥しい犠牲者の上に打ち樹てられた輝かしい平和も空しく、英国人は完全な幻滅に陥れられた。恐ろしい戦争の、荒廃と無益さを思い知らされたのみであった。所が、戦争と平和の四年間よりもずっと長期間、敢然と幻滅に立ち向つて来た人物がいる。それがハーディである。苟もヒューマニズムに信をおくなら、彼こそは其の精神の媒介者である。其れは飽くまで虚偽を憎む精神である。換言すれば、冷厳な現実の直視である。此の偉大なハーディの存在する英国にこそ、最後の救いが残されているとマリは信じたのである。之はハーディが、「最悪の凝視を強要す」(*it exacts a full look at the Worst—In Tenenbrs, 11*)と歌っているのを指していると思われる。

II

扱、マリの批評的立場は、一般に浪漫主義的と云われているが、之は勿論、T・S・エリオットの古典主義的立場と

対照されるからで、前述のように彼は冷徹な現実を直視する態度を忘れてはいない。しかし、取り上げる対象には、熱情を傾けて近ずいている事は、何れの場合でも同じである。マリが『文学の諸相』の中で論じているハーディ以外の詩人は、シェイクスピア、コウルリッジ、キーツ、ホプキンズ、メイスフィールド、イエーツ、エドワード・トマス等で、何れも浪漫主義的傾向の濃い詩人ばかりである。従ってハーディを其の範疇に入れている事は明白だと、思われる。尚、T・S・エリオットは『異神を追いて』(After Strange Gods, 1933)の中で、ハーディの小説を論じている。ハーディはよく風景描写をするが、之は人間の感情のみに興味を持つからである。此の感情主義の極は、「浪漫主義時代の信仰の根底」(a cardinal point of faith in a romantic age)に通ずると、エリオットは断じている。之はハーディの中に、個性的な浪漫主義的資質を見出している事になると思われ、注目に価する。

マリは、「ハーディ氏の詩」の冒頭で、ハーディの詩が、多くの批評家から、彼の小説の従属物として考えられて来た事実を指摘して、例えば、アーバクロンビ、リンド等、著名な批評家の名前を挙げている。しかし、マリの手にしたハーディの『全詩集』と、アーバクロンビの読んだ詩集とを比較する必要があると思われる。前者には第五詩集まで収録されているのに、後者は第三詩集までに過ぎない。此の量の差が、両者の批評の差を生み出したと、考えられる。但し、批評の質の差は別問題である。

ハーディの処女詩集が刊行されて以来、彼の詩を論じた批評を、年代順にマリまで迎って見ると、案外数少いのにながつく。ライオナル・ジョンソンの名著『トマス・ハーディの芸術』(Lionel Johnson: *The Art of Thomas Hardy*, 1894)も一九一三年になって漸く、バーตัน(J. E. Barton)の筆で詩の批評が付加されているに過ぎぬ。それ故一九一二年出版のアーバクロンビの『トマス・ハーディ』(Lancelles Abercrombie: *Thomas Hardy. A Critical Study*, 1912)が、該論で一番早く、目星しいものに思われる。今、之を一瞥しよう。

アーバクロンビが、ハーディの詩を、「彼の芸術生活の片手間仕事に過ぎなかったもの」と、考えたのは、前述したように、第三詩集『時の笑い草』(Time's Laughingstocks, 1909)までしか、読んでいないからである。しかし、「ハーディの詩には、絶えざる進歩の過程が見られ」、第一巻から我慢して読んで行けば、第二巻の数頁と、第三巻の大部分になると、「ハーディが英詩に純粋な付加えをした事が明白になる」と称揚している。が、『ウェセックス詩集』の眞価を見落したようである。

此処でアーバクロンビは、アース・ランサム(Arthur Ransome)の唱えた「顕勢語と潜勢語」(“kinetic” and “potential” language)の理論を応用しているが、仲々効果的である。即ち、「ハーディの用語は、主に言葉に秘められた力(其の潜勢力)の理解の不足を示している」と判断している。此の不足は明かに散文より、詩にとつて重大である。散文であれば、潜勢力を無視しても、言葉の論理的な意味に頼り得る。しかし、詩は単に言葉の論理からのみでは組立てられない。若しも、個々の言葉の論理的乃至は顕勢的意味に頼って、詩を作るとすれば、道は一つしか開けていない。其れはポーブの方法である。即ち、個々の言葉でなく、言葉のパタン特有の潜勢力に注意する事である。パタンのみが、散文化から救い得る。但し、パタンは厳密に維持されねばならぬ。ポーブ自身さえ、往々にして韻文化に失敗している。ハーディも、よく散文を変質させるよりも、単に偽装化している事がある。

次に、方言の生ずる所、ハーディの散文の場合と同様、言葉自身の潜勢力の増大、添加が生じる。そこで、主題がパタンと大いに関係がある事が分る。続いて諷刺詩と呼ばれる詩がある。之は散文と詩の間を彷徨するものである。更に、ハーディ特有の思想とスタイルが、明らかに結合する詩は、哲学的、又は心理学的芸術家を表わすものである。アーバクロンビは、後者の方が、優れていると考えている。何故ならば、想像力と情緒に及ぼす強い影響が、十

分にそれを物語る。又、かかる心理詩は現代的でもある。之等の詩こそ、英文学上特別の地位に価すると思われると、アーバクロンビは結んでいる。

ハーディの詩の批評に、潜勢力と顕勢力の理論を用いているのは、此の場合確かに卓見である。又詩人ハーディを十分に認め得なかつたとは云え、特質には十分光が当てられたと考えられる。尤も、アレン・テートは、アーバクロンビの書物が、「詩の批評には余り役に立たぬ、」と酷評しているが、之は彼の条件を斟酌しない為であらう。尚、マリも別の書で、聖書の文体の中には、顕勢の要素と潜勢の要素が複雑に錯綜している事を、指摘しているのも甚だ興味深い。^⑤

一九一六年には、チャイルドの『トマス・ハーディ』(Harold Child: *Thomas Hardy*, 1916)と、ダフィンの『トマス・ハーディ、ウェセックス小説研究』(H. C. Duffin: *Thomas Hardy, A Study of the Wessex Novels*, 1916)の二冊が出版されている。しかし、前者の「詩人ハーディ」という章は、一九二五年の改訂新版で増補したものである。後者も初版の最後の章で詩を扱ったが、一九二一年の第二版で前の誤りを認めて破棄し、新たに、「詩と『ディナス』(The Dynasts)」という章を付録として添加し、書名が小説研究だから付録にしたと断わっている。

チャイルドは、すべての詩と小説が『ディナス』に通じて居り、「後世の人には、ハーディは先ず第一に詩人、即ち『ディナス』の作者を意味するだろう^⑥」と断言している。彼は抒情詩より『ディナス』の方を高く評価したのである。之は後に、イーブリン・ハーディ(Evelyn Hardy)が、『ディナス』に、我々はハーディの成熟した性格と思想が、十分に力を發揮しているのを感じる。それに比し、彼の短篇、詩、長篇小説で一番優れているものでさえ、矮小に見え、どうやら男性的活力を欠いているように思われる」と、述べているのに一脈相通するものがある。

又、ダフィンは、過去三十年間の英詩人中、スウィンバーン、トムスン、イエーツ、ブリッジズ、メレディス(初期の詩)の五人は明らかにハーディより優れていると評している。之は、想像力と真摯さの点ではハーディは他の詩

人にまさるが、此の想像力と意図を詩に表わす神聖な靈感が、めったに湧かなかつたからだ、説明している。ともあれ、抒情詩人としての評価が、仲々定らなかつた状況が窺える。此処でマリに戻る事にする。

IV

マリは先ず長老批評家を非難し、若い批評家の批判力を讀んでいる。

ハーディは一八六八年に、詩をやめて、散文を書かねばならなかつた。従つて彼の詩才は遅く気紛れな開花を見せたのではない。『全詩集』には、一八六六—七年の日付けのついた初期の詩で、優れたものが十指に余ると、マリは述べ、「間色調」(Neutral Tones, 1867)を例に挙げている。

We stood by a pond that winter day,

And the sun was white, as though chidden of God,

And a few leaves lay on the starving sod;

—— They had fallen from an ash, and were gray.

The smile on your mouth was the dearest thing

Alive enough to have strength to die;

And a grin of bitterness swept thereby

Like an ominous bird a-wing....

かの冬の日、我等二人、池の畔りに佇めり、

ハーディの短詩をめぐって

陽は白みぬ、神にとがめられしごと、

枯れたる芝に、二ひら三ひら木の葉は散りぬ。

——トネリコの落ち葉、そは灰色に。

きみが口許のほほえみ、いとうら枯れて、

唯、死する力あるのみ。

ちらと浮べし笑み 苦々しく

そは羽ばたく不吉の鳥か。……

マリは此の詩と、処女小説『窮余の策』(*Desperate Remedies*, 1871)とを比較し、詩の驚くべき成熟さに驚嘆している。しかし、此の灰色の色調が、初期の詩の底に流れている基調である事には注意していない。

更に初期の詩には他に興味をそそる点があり、其の主なもの、或意味では技巧的なものであると、マリは考えている。「彼女から彼へ」(*She, to Him*, 1866)と題する四つのソネットは、決定的にシェイクスピアの『ソネット』の影響を受けている。又「偶然」(*Hap*, 1866)というソネットがある。

—Crass Casualty obstructs the sun and rain,

And dicing Time for gladness casts a moan....

These purblind Doomsters had as readily strown

Blisses about my pilgrimage as pain.

——愚鈍な偶然は陽と雨を遮り

博打うちの際は呻きを投げて喜ぶ。……

かかる半言の運命の可直 我が行脚の辺りに

苦しきも恵みも 勇み蒔き散らせし故。

マリは、技巧が完成の域に達し、詩人の云わんとする所が、簡潔に述べてであると、賞讃しているが、思想内容には触れていない。

此の初期の詩作時代から、長い小説の時代が挟まり、一八九七年に至る。此の期間中に作られた優れた詩は少なかったようだが、「フィーナを偲ぶ」(‘Thoughts of Phena’ 1890)という美しい詩は一八九〇年の作である。

Not a line of her wring have I,

Not a thread of her hair....

彼女の書きしもの一筆もなし、
髪の毛一筋も.....

ハーディの詩の進歩につき、小説の期間中秘められていたか、目に見えていたかの疑問が生じる。彼は一八九八年になって初めて詩集を公にした故、詩の進歩の相を詳細に辿る事は不可能である。しかし、成熟した詩人ハーディは、一八六〇年代の若い詩人と同じ詩的内容を持つ詩人である事は否めぬ。即ち彼の詩作態度は不変で、「愚鈍な偶然」という主題の変形を其のまま残したと云う。之は現代の批評家も認めている通りである。

ハーディが結局調和を見出したという事は真実で、此の調和は、ハーディの成熟した詩の隅々に発見される。それは個人的情緒に、所謂優れた詩の非個性化を与える。与えられた詩は記録でなく、経験の極致である。マリは云う。

「偉大なる詩の根底には、すべてを包含するリアリズム、すべての経験に対する適合、喜びや失望に於ける単に個人的なもの拒否がある。」例えば「鼓手ホッジ」(‘Drummer Hodge’)の真実、美しさ、慰めは如何。悲しみがあ

るが、それは天界の悲しみである。此処に彼の詩の偉大さの資質がある。一九二一—三年の恋愛詩の彼は、詩の中で追憶に負ける人物ではない。宇宙の叫びを發する偉大な詩人であると、マリは云っている。そして、「誰一人として、我々の知識や苦悩に適応しない」として、ハーディが一番のより所である事を強調している。彼は基本的主題の名手であり、其の各作品は全体の一断片である。即ち、包括的全体を暗示する個体である。従つて、「彼の挿話的事件に対する反応は、其の背後と内部に、宇宙に対する反応を蔵している」というマリの判断が下される。但し、之は後になって色々論争を捲き起した問題の所である。

図表の線が、想像上すべての空間を含むように作られるように、ハーディの詩には、拡大してあらゆる人間経験を包擁しているものがある。「破られた約束」(A Broken Appointment)は、其の例である。マリは評している。

「此のような一見個人的経験の断片に、宇宙の目に目えるように表わされた裏書がある。一恋人でなく、全人類の希望が其のリズムの下に押しつぶされている。其の事件の残酷さは詩の動きの中で強烈になつて、運命の重い足音さえ聞き得るに至る。」果ては、運命の手で書かれたとさえ思うに至ろう。

ハーディはマリの批評を読み、痛く喜んで手紙を送つたが、マリの理論に感心したと述べている。此の理論とは、『幻影の瞬間』(Moments of Vision, 1917)という題名をハーディが選んだ理由に関するものである。偉大な作家というものは、人生については或結論に達するのでなく、人生にある特質を識別するものである。彼の情緒はお互に強め合つて、徐々に彼の心内に、情緒の習癖を作る。或種の対象と出来事は特殊な重みと意義を以て印象ずける。此の情緒的偏向乃至素地は、マリが特に作家の「経験の型」と呼んでいるものである。従つて、「過去の情緒の此の神秘的集積のおかげで、円熟期の作家が特殊のものに、宇宙の重みと力を与える奇蹟を果し得るのである。ポードレルが書いてゐる、『或種の心の状態では、人生の深い意義が、如何に陳腐でも、目の前にある光景の中に表わされる。即ち、それは此の意義の象徴となる』^⑩」つまり、「幻影の瞬間」に於て、詩人ハーディは、個々の人生の事件の中

に、人生の本質的特質を認めただのである。

更に『境遇の皮肉』(Satires of Circumstance. 1914)の意味は何か。特殊な境遇というものは類型的でもなく、又偶然なものでもない。即ち、詩人からもっと大きく様々に理解された人生の特質の意味を、他人に伝えるのに必要な象徴を表わしていると、マリは説明している。

次に、マリは詩の過程には二重要素があると云っている。詩的方法と詩的直感力がそれである。前者は象徴の発見や同義の立証とか、情緒の転置と伝達に關与している。後者は個々の特質の中に全体の特質を認める、最高の詩的行爲である。前者は屢々後者なしで存在する低次のものである。従つて、詩的直感力の有無が、大詩人と小詩人を區別する原理であるとして、「ハーディ氏は大詩人である」と、断じている。大詩人とは、自分の求めている特質をよく知っている者である。故に、「ハーディ氏は慎重に反応の感情の清純さを保つことによつて、他のすべての現代詩人よりはるか高所に位置している。世界の緩慢な汚点に染まる事はなかつた。最初から彼は、職業的楽天主義者だけでなく、一般世間も加わる忘却の陰謀から超然としていた^⑩」という靈感的な解釈を、マリは下したのである。

最後にマリは、ハーディが老年になつて、力と熱情で無比の一連の恋愛詩で、詩人としての業績を飾つた事はふさわしいと述べ、「ハーディ氏が人生につき我々に語らねばならぬすべて、彼の理解した真理のすべては、之等の詩の中にあり、詩の開闢以来、之以上よく理解し、我々に語つた詩人はない」と結んでいる。

マリは詩人ハーディを大詩人とまで高く評価して、小説家ハーディと並列させた最初の批評家である。従つて、『全詩集』の発行された一九一九年は、ハーディの詩人としての地位が、認められ始めた重要な一転機をなす年である。しかし、マリは稍々神秘的、主観的批評を行っている嫌がある。一九二〇年代になるとそれに反発する批評が現われるが、それも自然の成り行きであろう。

一九一九年九月マリはキャサリン・マンズフィールドと共に、伊太利のサン・レモ (San Remo) に数週間滞在した。それから彼女の為に、近くのオスペダレッティ (Ospedaletti) に家具付小別荘を借りてやった。彼女が落着くや否や、マリは『アシニーラム』編集の為、急ぎ帰英した。どうやら此の帰英期間中に、ハーディの詩の批評を執筆した模様である。

一方伊太利に残ったマンズフィールドは、暫くは幸福であった。「しかし、やがて病氣と孤独と絶間なき海の音が、彼女を陰鬱にし始めた。」^⑩そこでマリは心配して、其の年の十二月の第三週に別荘に赴いて、二週間滞在した。此の頃、マンズフィールドは日記に、次のようなハーディの詩の一節を書き留めた。

I dream that the dearest I ever knew

Has died and been entombed,

I am sure it's a dream that cannot be true....

Yet stays this nightmare too appalling,

And like a web shakes me,

And piteously I keep on calling,

And no-one wakes me. ('Bereft, She Thinks She Dreams')

私は見ている 最愛の人が

亡くなり おくつきに葬られた夢を。

「それは夢なり、真実の筈なし」と確信するが。――

余りに怖ろしい此の夢魔が、留まって、

蜘蛛の巣のように私を搔する、

それで哀れに私は 呼び続ける、

けれど 誰も私を起してはくれない。

痼疾の為、憂鬱になり、絶えず死の影に怯えていたマンスフィールドの心境が、此の詩のメモからよく窺える。

扱、マリは愈々一九二一年五月、マックス・ゲート邸にハーディを訪問した。種々雑談の末、彼はハーディの詩を米国でも同時発売するための代理人を決めるべきだと提案した。ハーディは暫し黙考して口を開いた。

「今の所、そのような骨折り甲斐がないと思います。おまけに私の詩は極く個人的なものですから。」自分の詩に對する考えが明らかに此の言葉の中に表われている。

VI

リチャーズは一九二六年、『科学と詩』(T. A. Richards: *Science and Poetry*, 1926)を公にしたが、其の第七章で現代詩人を論じ、ハーディを始め、デ・ラ・メア、イエーツ、ローレンスを組上にのぼせている。彼は一九三五年、本書の改訂再版を出し、随所に改訂を行なっているが、初版と比較すれば甚だ興味が深い。其の再版で、本章のエピグラフとして、T・S・エリオットの「聖灰水曜日」(*Ash Wednesday*)から引用している。

∴ spitting from the mouth the withered apple-seed.

口から萎びたリンゴの種をへっぺっと吐きながら。

ハーディの短詩をめぐって

此の詩句の引用は、現代詩の性格を旨く象徴し得て妙である。

ハーディの作品は、リチャーズのいう「自然の中和性」(neutralization of nature)が成し過げられた全期間にまたがるのみならず、至る所其の変化をはっきりと反映している。即ち、ハーディの『全詩集』は此の問題を殆ど常に取り上げているというのである。

しかし、リチャーズは、此処でマリの登場を願っている。「ミドルトン・マリ氏は、(此の評論の或部分が、彼の最近の立場に当てつけていると、読者から疑われるかも知れぬが、)彼の『文学の諸相』の中で、ハーディ氏の詩がいかにも格別『我々の知識や苦悩に適応』しているかを、旨く指摘している。『彼の挿話的事件に対する反応は、其の背後と内部に、宇宙に対する反応を蔵している』^⑩と、マリの言葉を引き、自分だったらこうは云わない。擬似言説として感情的に読むのであればすばらしいと、大いに皮肉っている。リチャーズは、此のような事をハーディがしなかつたと考えたのである。即ち、「彼は宇宙を、いかなる反応もお互に無関係なものと認めて、宇宙に反応していない」と、全面的に否定している。しかし、マリが、次のようにいう時は、感情的にも科学的にも旨く靈感を受けている。「ハーディ氏は慎重に反応の感情の清純さを保つことによつて、他のすべての現代詩人よりはるか高所に位置している。世界の緩慢な汚点に染まる事はなかつた。最初から彼は職業的楽天主義者だけでなく、一般世間も加わる忘却の陰謀から超然としていた」というマリの言葉は、英詩に於けるハーディの地位と序列を、巧みに表現している。ハーディは、終始慰藉(忘却と信念の慰藉)を受ける事を拒否した詩人である。此処に死に対する偏執が生れると、いうのである。「それは、死を凝視する際に於て、宇宙の無関心さに直面して始めて、人間の態度として自立的になるべき必要が、最も痛烈に感じられるのであるから。最も偉大な悲劇詩人のみが、同じ自恃的で容赦なき容認をなし過げた」と、リチャーズは結んでいる。

マリは、詩の神秘性を体験する事により、詩の批評分析を行なっているが、リチャーズは、詩的体験を、心理学の

応用によって分析している。そこでリチャーズは、マリの情緒的立場を排し、科学的立場を主張し、マリを非難したのである。但し、初版でマリの「最近の立場」とあるのが、再版ではマリの「立場の幾らか」と、稍々緩和されているのが、目につく。

翌一九二七年春、E・M・フォースタ(E. M. Forster)は、ケンブリッジ大学で講演を行ない、其の中で、ハーディの小説の弱点として、作中の人物が、余りに多くの筋書への寄与を強要されている事を指摘している。しかし、「ハーディは私には本質的に詩人であると、思われる」という言及は興味深く思われる。

更に翌一九二八年一月、ハーディは八十七歳の高齢で、遂に其の生涯の幕を閉じた。同年ハーディの伝記の上巻がハーディ夫人の手で完成された。ヴァージニア・ウルフは早速其の読後評を記したが、其の中で、「彼の才能は普通よりずっと長く隠されていた。詩は時折抽出しにしまいこまれた。しかし、詩を書く欲望は、彼の一番の詩作時代に於てさえも、気紛れであやふやなものであつたように思われる」と、述べているが、どうやら皮相的見方のようである。

VII

一九二〇年代の批評の中、特に異色のなのは、リチャーズに尽きるようである。一九三二年、リーヴィスは『英詩に於ける新傾向』(F. R. Leavis: *New Bearings in English Poetry*, 1932)の中で、詩人ハーディを論じているが、其の出発点は明らかにリチャーズである。即ち、「ハーディは単純な態度と見地を持つ素朴な詩人である。此の態度と見地は、I・A・リチャーズ氏が『科学と詩』の中で、『自然の中和性』と呼んでいるものの産物である。ハーディの偉大さは、自然は人間の価値に無関心であるという結論(それは科学によって強められたと彼は信じた)を、そっくり受け入れた正直さ、其の承認の完全さ、其の反応性の純潔さと適応性の中にある」と、先ずリチャーズの意見

に賛意を表している。しかし、リーヴィスは、ハーディの技巧の中には、若い詩人から取上げられるものがなく、彼の独創性は、高度の批評意識に順応するようなものでなく、素朴な保守主義に順応したものである事を、強く指摘している。

更にリーヴィスは、「ハーディの偉大な詩は性格の勝利である。時々彼が深く感動している時（其の衝動は通例痛烈な追憶であるが）、此の性癖と習性が急に力を現わし、其の奇癖は激しい個性的価値に変わる」と述べているが、エリオットが其の翌年、『異神を追いて』の中で、ハーディの個性を論議しているのが想起される。即ち、エリオットは、ハーディが何物にも拘束されぬ力強い個性の例を提供しているが、彼の表現しなければならなかった自己は特に「健全な、又為になるもの」とは思われぬと非難したのである。しかし、C・ディ・ルイスは『トマス・ハーディの抒情詩』(C. Day Lewis: *The Lyrical Poetry of Thomas Hardy*, Warton Lecture, 1951) という講演の中で、エリオットとリーヴィスの批評に反駁して、「反証の例を幾らでも挙げられると云っている。

又、リーヴィスは、ハーディの偉大な詩は、直接自分自身の過去の追憶から出発し、全くの喪失感、偶然の盲目性、恋愛の痛烈さと無益さ、時の残酷さを特に喚起させるものであると、重ねて述べている。しかし、ハーディは田舎者で、現代詩を取り巻く環境とは無関係であり、彼の詩がアンソロジーに収録されるのは、全く慣習に依ると、仲々手厳しい。其れ故、ハーディの詩は殆ど読まれていないか、或は殆ど鑑賞される事はないと述べ、最後に、同時代の詩に及ぼした影響について指摘する事は可能であろうが、「シロップシアの若者」と交わる事の出来るハーディに価値がないと、極論している。

優れた現代詩人ディ・ルイスが、又、自選詩集 (C. Day Lewis: *Selected Poems*, The Penguin Poets, 1951) の序文で、「鋭敏な耳を持ち、冷静な見解を持ち、ハーディの詩の十分な知識を持つ読者は、彼から影響を受けた私の詩と、ハーディ自身の詩の間に、類似性と同じ程相違性を見出すであろう事は可能だと考える」と述べているのも

皮肉である。リーヴィスの態度は痛烈そのもので、リチャーズの祖述者である事がよく窺える。

其の他三〇年代の批評書としては、ラットランドの『トマス・ハーディ』(William Rutland: *Thomas Hardy*, 1938) という同名書二冊が注目される。之は「彼の作品と其の背景」という副題付きの浩瀚なものと、其の半ばに足りぬ簡約版様の二冊であるが、何れも詩に関しては目立った批評が見られない。唯『ウェセックス詩集』全体は、之迄公にされたいかなる作品よりも遙かに明らかに、著者の個性の多くを表わしている^⑧ という言葉は、適確な判断である。

VIII

一九四〇年と云えば、ハーディ生誕百年祭に当る。此の年に出版されたハーディ関係書の中、特異なものは、『サザン・レビュー』の「ハーディ百年祭記念号」(*The Southern Review*: Thomas Hardy Centennial Issue, Summer 1940)、『ウェーハックスのハーディ』(Carl J. Weber: *Hardy of Wessex*, 1940)、『ヤン・編』『ハーディ詩選』(*Selected Poems of Thomas Hardy*, edited by G. M. Young, 1940) の三冊である。

尤も、米国に於けるハーディ研究の第一人者であるウェーバの書は、ダグラス・ブラウン(Douglas Brown)から「新鮮な材料に拘らず、此の伝記は気紛れすぎる」とか、アレン・テートから、「批評の不適切の為、詩や小説の理解に貢献する所が殆どない」と、非難されているが、貴重な文献には違いない。

『サザン・レビュー』の巻頭には、ハーディの短詩「合衆国に招待されて」(On an Invitation to the United States) が掲げられている。之は、再々に互る米国からの招待を断わり続けて来たハーディの心境を歌ったものである。成熟した時代を未来に蔵した近代の海岸、即ちアメリカ大陸を探る熱意は失せてしまった。過去の人々の跡を辿り得る古い島で、生涯を終わりたいと、ハーディは考えたのである。巻頭を飾るには、一寸場違いのようであるが、米

國に關する珍らしい詩の幾でもあつた。John Crowe Ransom, R. P. Blackmur, Howard Baker, Delmore Schwartz, W. H. Auden, F. R. Leavis, Allen Tate, Bonamy Dobrée, Morton Dauwen Zabel, Katherine Anne Porter, Donald Davidson, Jacques Barzun, Arthur Mizener, Herbert J. Muller 等の論文を収めた、仲々多様な顔ぶれのシンポジウムである。曾て詩人ハーディを否定したリーヴィスの論文が、「詩人ハーディ」(“Hardy the Poet”)と題されているのが人目をひく。

今、此の中で読み得た二、三の論文について述べよう。

シュワルツの論文は「アマス・ハーディに於ける詩と信」(Delmore Schwartz: “Poetry and Belief in Thomas Hardy”)に關するものである。彼は、リチャーズのマリ攻撃の事を取り上げてゐる。之は前述のように「ハーディが宇宙に反応を示さなかつたという主張の事である。シュワルツは、「ハーディは殆ど何時も、宇宙に対する反応を詩に持ちこんだ」と、マリに賛意を表している。そして、ハーディの信乃至は不信が、彼の詩に大きな力を与えたと考え、特に彼の信が直接的役割を果す「牡牛」(“The Oxen”, 1915)という詩を読めば、それが分るといふ。

Christmas Eve, and twelve of the clock.

クリスマス前夜、時は十二時

“Now they are all on their knees,”

「今や皆、膝まぢきひひあり」と

An elder said as we sat in a flock

古老は云えり、我等群がりて

By the embers in hearthside ease.

残り火の炉辺にくつろぎし時。

We pictured the meek mild creatures where

我等心に描きしは、麁だこの

They dwelt in their strawy pen,

おりたすむ柔和な生き物。

Nor did it occur to one of us there

されど誰一人、思いつかず

To doubt they were kneeling then.

彼等膝まずきつゝあるを疑わんとは。

So fair a fancy few would weave

かく美しき空想を織る者

In these years! Yet, I feel,

近年今やまれ。されど我思う、

If someone said on Christmas Eve,

クリスマス前夜、次のこと

“Come; see the oxen kneel

「来れ、牡牛膝まずくを見よ、

“In the lonely barton by yonder coomb

幼き頃見馴れし、あなたの

Our childhood used to know,”

谷あいの、淋しき納屋にて」

I should go with him in the gloom,

云う者あれば我従わん、闇の中も、

Hoping it might be so.

かくあれかしと望みつゝ。

此のような子供時代のクリスマス物語の、特異な場面と筋書の実在を可能ならしめるのは、ハーディの感受性である。其の感情は「かくあれかし」という望みである。此の感受性自身は明確な信念の産物である。しかし、此の詩が書かれるには、彼の感受性の意識が、知性の容認した科学思想に反対する事が必要であった。両者とも詩に入るべきである。宇宙に対する反応が、ハーディのクリスマス物語に対する反応に含まれているというのは、こういう意味である、シェワルツは述べている。

ブラックマリーの論文は、「トマス・ハーディの短詩」(R. P. Blackmur: “The Shorter Poems of Thomas Hardy”)と題されている。ハーディは『新旧抒情詩』(Late Lyrics and Earlier, 1922)の「弁疏」の中で、アーンルドの言葉を借りて、詩の真の機能は「人生に観念を適用すること」であると述べている。ハーディは実際に観念を

用い、適用した。しかし、結果は観念によって感受性が損なわれるのみであった。ブラックマーは、ハーディの失敗は、観念の同化吸収の方法の失敗であると考えている。死、記憶、時の三重固定観念が、相互の同化吸収作用で、何か、三位一体のようなものを作る時、最良の効果が生ずると云うのである。それは「最悪の擬視」と「妨げられた貞節」(Crossed fidelities)の主題を排除する作用で、此の時、詩人は観念の侵害から全く自由になるのである。

又、ハーディにとつて、全く個性的で客観的なものだけが彼の偉大な力を支配出来たとは、境遇の皮肉である。エリオットが『異神を追いて』の中で、ハーディは「時には彼の文体は、美文(good writing)という段階を通らないで、一足飛びに崇高なものになる事もある」と云っているのは、正確に此の意味である。「タイタニック号」、レズリ・ステイヴンやスウィンバーンを偲ぶ詩、「国々の碎ける時に」(In Time of "The Breaking of Nations")等は知性の破壊が見られず、崇高なものである。

最後にブラックマーは、ハーディは観念によって損なわれた感受性の偉大な例である。又恐らくは、スウィフト以来、其の侵害を切り抜けるのに十分な程偉大な感受性の、又とない例であろうと、結んでいる。

アレン・テートは「ハーディの哲学的隱喩」(Allen Tate: "Hardy's Philosophic Metaphors")について論じている。

テートは先ずハーディの思想的背景を明らかにしている。ラットランドが指摘するようにハーディは文学経歴の始めから、終始一貫、或哲学的態度を維持し、それは不変だった。然るに、一九一五年、現代哲学者が誰も、ハーバート・スペンサーの「第一原因」に賛成しない事を読み、全く狼狽を感じたのである。結局彼の見解は哲学的でなく、単に沈思瞑想的なものであった。彼の宿命論は、ビクトリア朝の機械論に過ぎず、偶然は宇宙(第一原因)の機械的運行に時たま、はさまる事を表わすに過ぎない。彼の知的立場を単純な形で表わした例として、「自然の質問」(Nature's Questioning)を挙げてゐる。

When I look forth at dawning, pool

Field, flock, and lonely tree,

All seem to gaze at me

Like chastened children sitting silent in a school;

Their faces dulled, constrained, and worn,

As though the master's ways

Through the long teaching days

Had cowed them till their early zest was overborne.

Upon them stirs in lippings mere

(As if once clear in call,

But now scarce breathed at all) —

“We wonder, ever wonder, why we find us here!

“Has some Vast Imbecility,

Mighty to build and blend,

But impotent to tend,

Framed us in jest, and left us now to hazardous?

“Or come we of an Automaton

夜明け方 私が外を眺めると

池、野原、羊の群、一本だけの木、

皆私を睨みつけているよう、

学校でこらしめられ黙々と座す生徒のように。

ぼんやり、むっつり、やつれた顔で—

まるで先生の仕打が

長い授業の日々を通じて彼等を脅し

初めからの熱意を押し殺したと云わぬばかりに。

彼等の心にゆるぐは只唇を動かし、

(曾ては大声で叫んだが

今はひそみ声にもならぬかのように)

「我等はどうして、どうして此処に居るのか!

「広大な愚かしき何ものかが—

築き混ぜるには力は大きいが

世話は無力なもの—

我等を冗談に作り、今偶然に任せたのか?

「それとも、一つの自動人形から生まれたか?

Unconscious of our pains?...

我等の苦痛に無意識な—

Or are we live remains

それとも生ける残骸なのか?

Of godhead dying downwards, brain and eye now gone?

倒れ死にゆく神の、—脳も眼も今は失せて。

“Or is it that some high Plan betides,

「それとも、或高い企みが控えているのに—

As yet not understood,

未だよく分らぬ

Of Evil stormed by Good,

善に攻めたてられた悪の—

We the Forlorn Hope over which Achievement strides?”

我等は、成就に追いつかされる絶望的希望か？」

Thus things around. No answerer I...

まわりのもの、かく問うも、いらえるすべもない。

Meanwhile the winds, and rains,

一方、風も雨も

And Earth's old glooms and pains

地球の昔ながらの愁いも傷みも

Are still the same, and Life and Death are neighbours nigh.

尚も変わらず、生と死は近い隣人だ。

テートは次のように分析批評している。詩形から見ると、詩行が讚美歌風に四—三—四—三歩格となるべきが、四—三—三—六と終る。此の四行目のアングサンドラインは成功で、中間休止に意味が重なって、二つの三歩格に分裂するのを防ぐ。第五連の最後の二行は、莊嚴さに於て、最も優れたものである。

質問をした「まわりのもの」は、第一連では、池、野原、羊の群、一本の木として現われ、之等は直ちに生徒に変わる。自然物が人格に変わる比喩 (similie) は容認出来るとしても、第二連では完全な隠喩 (metaphor) となる。即ち、ここに媒体 (vehicle) が主意 (tenor) にとって代る隠喩の例がある。自然物 (tenor) が非常に弱く知覚されるので、生徒 (vehicle) が自然物を全く抹殺する。詩が第四連に進むと、生徒としての無生物の一群が質問を発している。

ハーディは十九世紀の一元論者であるので生徒も自然と共に、（築きませるには力は大きいが、世話は無力な）自然神論の不在神のおざりを被る。此の神とは、第二連第二行の先生である。此処でも隠喩的媒体が主意にとって代る。此の神の自然神論的性格から考えると、「第一原因」の人格的、擬人観的表現である「先生」の姿は、彼の論理的意義に矛盾する。即ち此の神を劇的に描くため、ハーディは彼を人格神論の神にした。しかし彼が第五連の「自動人形」であれば、授業の素養を欠き、「世話は無力なもの」であれば存在も出来ぬ。

此の詩や他の哲学詩に於て、主意と媒体の結合に依つて得られる明瞭な意味の限界は非常に狭い。「倒れ死にゆく神」というすばらしいイメージの中でさえ、主意と媒体の間かなりの矛盾が見られる。神が宇宙を動かし始めてから、後を偶然に任したと云う為に、ハーディは人格神論の神を「盲目で愚かしきもの」として示し得るに過ぎない。と、以上のようにテートは説明している。結局、ハーディの哲学は、彼の感受性の限界を少し超える傾向にあり、彼の抽象的概念は、此のように稍々無責任なものだと、テートは考えている。

K

ハーディの詩の批評は、一九一九年を転機として、小説の従属物視から脱却し、詩人としての本格的批評が始まり一九四〇年に至った。しかし、詩人としての声価が定まった訳ではない。其の為には、未だ四〇年代、五〇年代にまたねばならない。

所謂、新批評に属する批評家の一群は、ハーディを神格視する傾向に反発する為に筆を執った丈で、此の年を最後に、ハーディの詩から関心を失ったようである。それはハーディの哲学詩を分析して見たが、十七世紀の形而上詩に見られるような知的意識が発見されなかつた為かも知れぬ。尤も、ランサム (John Crowe Ransom) は、『ケニヨン・レビュー』(The Kenyon Review) 一九五一年夏季号で、二十世紀前半の詩を回顧し、五大詩人として、ハーディ

イ、イエーツ、ロビンソン、フロスト、エリオットの名前を挙げている。彼は特にハーディ丈に注釈を加え、「残忍な宇宙に、痛ましくも順応しなければならぬ若者が、常に存在すると考えなければならぬ。若しそうなら、此の一団の詩篇は永遠に役に立つだろう」と、述べている。

一九四〇年代から五〇年代にかけて注目すべきものは次の通りである。ブランデンの『トマス・ハーディ』、ハウラの講演『ハーディの抒情詩』、サウスワースの『ハーディの詩』(J. G. Southworth: *The Poetry of Thomas Hardy*, 1947)、ディ・ルイスの前述の講演、イープリン・ハーディの『トマス・ハーディ』、ダグラス・ブラウンの『トマス・ハーディ』(Douglas Brown: *Thomas Hardy*, 1964) 等が之で、之等を通じて感じられるのは、詩人ハーディの地位が、二十世紀の前半を越して、漸く安定したという事である。

此の中で、ブラウンが『ディナスツ』を批評から除外しているのが目をひく。彼は従来の知的背景重視を排し、農村的背景から論じているので、構想と概念に優れた叙事詩劇も、文学的、詩的価値では、相対的に劣ると考えたのである。此の知性の役割を軽視する立場から、彼はハーディの一連のエレジーを、詩的業績の最高においている。其等の中にハーディの詩才の不思議な勝利が構成され、其の勝利によって彼は大詩人であると、ブラウンは讃えている。ブラウンの批評に対して、色々異論があると思われるが、マリトリチャーズ一派の批評を奇妙に混淆した未熟なものが其の中に感じられないだろうか。両者を止揚した批評は、此の年若い批評家の将来に期待すべきであろう。此のあたりに新しい批評の方向が暗示されていると思われる。更にブランデンの評伝の適確さと、ルイスが「生れざる貧乏人の子へ」(To An Unborn Pauper Child) という詩について述べた温かい言葉を付け加えれば十分であろう。「我々が此の詩から受けるものは、全く疑いもなくトマス・ハーディ自身のイメージである。若し云えるとしたら、寛容のイメージである」²⁰

(小論を草するに際し、大沢衛氏の著書並びに、同氏と斎藤勇氏の訳詩を参照させて戴いた事を此処に記し、感謝の意を表す。)

〔出〕

- ㊶ Florence Emily Hardy: *The Later Years of Thomas Hardy*, p. 185.
- ㊷ *Ibid.*, 80.
- ㊸ J. M. Murry: *Katherine Mansfield and other Literary Portraits*, p. 215.
- ㊹ Lascelles Abercrombie: *Thomas Hardy. A Critical Study*, p. 134.
- ㊺ J. M. Murry: *The Problem of Style*, p. 133.
- ㊻ Harold Child: *Thomas Hardy*, p. 83.
- ㊼ Evelyn Hardy: *Thomas Hardy. Critical Biography*, p. 282.
- ㊽ J. M. Murry: *Aspects of Literature*, p. 129.
- ㊾ *Ibid.*, p. 130.
- ㊿ J. M. Murry: *The Problem of Style*, pp. 27-28.
- ㊶ J. M. Murry: *Aspects of Literature*, p. 136.
- ㊷ *Journal of Katherine Mansfield*, p. 179.
- ㊸ I. A. Richards: *Science and Poetry*, p. 69.
- ㊹ E. M. Forster: *Aspects of Novel*, p. 89.
- ㊺ Virginia Woolf: *The Captain's Death Bed*, p. 64.
- ㊻ F. R. Leavis: *New Bearings in English Poetry*, pp. 57-58.
- ㊼ *Ibid.*, p. 59.
- ㊽ William Rutland: *Thomas Hardy*, p. 97.
- ㊾ *Critiques and Essays in Criticism 1920-1948*. selected by R. W. Stallman, p. 338.
- ㊿ C. Day Lewis: *The Poetic Image*, p. 152.